

自己評価報告書

平成 23 年 4 月 19 日現在

機関番号：34511

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20720126

研究課題名（和文） 方言文法の視点による推量表現の変化に関する研究

研究課題名（英文） Changes in Usage of Presumptive Forms in Japanese Dialect

研究代表者

橋本 礼子（舩木 礼子）(HASHIMOTO-FUNAKI REIKO)

神戸女子大学・文学部・准教授

研究者番号：00454736

研究分野：日本語学・方言学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：方言、推量表現、文法

1. 研究計画の概要

(1) 老年層・中年層・若年層の三世代への臨地面接調査によって、高知方言の推量・確認要求およびその周辺の意味を担う形式について、世代別に精密な文法記述を行う。これによって、各世代のもつ推量等の表現形式の意味・機能の異同を質的に確認する。

(2) 高知市在住者の談話を採録し、推量・確認要求およびその周辺の意味を担う形式の使用傾向を計量的に把握する。

(3) 上記の(1)質的研究と(2)量的研究の結果を総合的に検討し、高知方言の推量・確認要求およびその周辺の意味を担う形式群の近年の変化傾向をまとめる。

(4) 上記(3)の結論とこれまでの研究成果を総合し、高知方言の推量表現に関わる意味分野にみられる歴史的変化の方向性と変化の要因について分析を行う。

2. 研究の進捗状況

(1) 三世代への臨地面接調査を実施し、高知方言の推量表現や確認要求的表現などの世代別データを得た。調査には、平成 17 年度に科学研究費基盤研究(B)に研究協力者として参加したプロジェクト（代表：大西拓一郎（国立国語研究所））で作成した「推量表現」、「確認要求表現」等の文法記述用調査項目リストを調査票として使用した。この調査から、各世代のもつ推量等の表現形式の意味・機能の異同を質的に確認した。

(2) 高知方言について文法項目に着目した

談話分析を適切に行うために、パイロットスタディとして方言談話における形式切換えに関する分析・考察をすすめた。これによって談話資料への効果的なタグ付けや用例収集方法などを検討した。

(3) 高知市在住の老年層と若年層の談話を 2 種類採録して、分析に適した文字化データを作成した。この文字化データを用いて、バリエーションの関係にある推量表現系の形式群について用法ごとの出現傾向を量的に分析した。これによって、複数の推量表現形式が、伝統的高知方言においては前節要素の品詞（活用語）に制限されていたが、現在は文法的あるいは談話機能的に違う性質を持つものとして使い分けられている傾向を確認した。このことには、別方言の推量表現形式が流入して言語接触が起こり、これによって推量表現の枠組みに変化が生じていることが考えられる。

(4) これまでの調査結果の補充調査を実施し、高知生え抜きの話者に対して形式の使い分け意識などを確認した。ここで得たデータをふまえての分析を現在進めている。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

（理由）

本研究の初年度に高知在住の協力者と良好な関係を築くことができたことが、本研究を順調に進める大きな鍵となった。

また、他の方言にも使用できる汎用的なものではあったが、記述のために必要な調査票が既にできあがっていたことも、研究を進める上でプラスとなった。

4. 今後の研究の推進方策

(1) 臨地面接調査による質的分析結果と、談話資料の分析からなる量的研究の結果を総合的に検討し、高知方言の推量表現形式群の近年の変化傾向をまとめる。

(2) 本研究で得た結果と、幕末以降の土佐・高知方言の推量表現に関するこれまでの研究成果を総合し、高知方言の推量表現に関する歴史的変化の方向性と変化の要因についてまとめる。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

① 船木礼子 (橋本礼子)、「カジュアルスタイルにおける方言切換え—形式の受容と切換えの要因—」、『神女大國文』、第22巻、85-66頁 (横書き1-20頁)、平成23年(2011年)、査読 無

リポジトリ URL

http://lib.yg.kobe-wu.ac.jp/cgi-bin/retrieve/sr_bookview.cgi/U_CHARSET.UTF-8/KY00001337/Body/hashimoto-ko22.html

② 船木礼子、「意志表現」、『方言文法調査ガイドブック』(国立国語研究所 全国方言調査委員会編) 3、15-31頁、平成21年(2009年)、査読 無

③ 船木礼子、「希望表現」、『方言文法調査ガイドブック』(国立国語研究所 全国方言調査委員会編) 3、33-47頁、平成21年(2009年)、査読 無

④ 船木礼子、「感動詞—詠嘆表現2—」、『方言文法調査ガイドブック』(国立国語研究所 全国方言調査委員会編) 3、77-103頁、平成21年(2009年)、査読 無

[学会発表] (計1件)

① 船木礼子、「カジュアルスタイルにおける方言切換え—移住先方言の受容と切換えの要因—」、日本方言研究会、第88・89回研究発表会、平成21年(2009年)10月30日、島根県立産業交流会館くにびきメッセ